

政治社会状況と現代文学——新型コロナウイルス禍のなかで

綾 目 広 治

一 「熱源」と「まつろわぬ邦からの手紙」

すでに鬼籍に入った政治家で総理大臣も務めたことのある人物が、首相在任中に、「日本の治安が良いのは、日本が単一民族国家だからだ」ということを述べたことがあった。その人物の社会的歴史的見識の無さに、良識ある人たちは呆れ返ったのだが、言うまでもなく日本は大和民族だけでなく複数の民族が共存する国民国家である。その日本という国民国家が成立していく過程の中で、小さな民族や集団は強引に日本国家に包摂されていったのである。そのことは沖縄の例を思い浮かべただけで了解できるだろうが、アイヌ（「人間」の意）の人たちもそうであった。しかし、これまでの現代文学ではアイヌの人たちのことは、ほとんど取り上げられたことはなかった。第一六二回の直木賞受賞作の川越宗一『熱源』（「文藝春秋」、二〇一九・八）は、その稀な試みである。『熱源』は、歴史上の人

物たちが登場人物であり、出来事も実際の歴史的事件に沿って語られているために、歴史小説とも言えるし、あるいはノンフィクション・ノベルと言えなくもない。

ヤヨマネクフ（山辺安之助^{やまべやすのすけ}）たちは樺太で生まれたが開拓使たちに故郷を追われ、北海道に集団移住を強いられたのだが、天然痘やコレラの流行で妻や多くの知人を亡くした後、再び樺太に戻る。そして、アイヌの人たちに教育を施すために学校作りに従事する。他方、ポーランド独立運動家たちのロシア皇帝暗殺計画に連座させられてしまったポーランド人、プロニスワフ・ピウスツキは、流刑地サハリン（樺太）で民族学に目覚め、やはりサハリンに住む民族学者レフ・シュテルンベルグの教導のもとに学術論文を発表し始める。そして、その民族的調査を通して山辺安之助たちと交流を持つようになり、アイヌの未亡人の女性と結婚することにもなる。

日本国家に飲み込まれていくアイヌの人たちと、大国ロシア

に併呑されていくピウスツキとは、同様の悲しみと憤りを持っていたと言える。『熱源』が興味深い物語となっているのは、一つには、大国や強国からすればその周辺の民族は文化の低い集団のように思われることが多かったのだが、それが全くの誤りであることを、読みやすく且つ熱い筆致で生き生きと描いているところにある。その誤りは差別の問題と繋がっている。

もっとも、『熱源』では差別問題は深く剔抉くつげつされているとは言い難いが、しかしアイヌの青年で代用教員であった青年の思いとして、こう語られている。すなわち、「耐えられなかったのは、その学校の教師たちはアイヌを不潔で無気力で蒙昧もうまいであると決めつけていて、生徒にあからさまな蔑視を向けるか、よくても憐愍の情で接することだった」と。また、その差別をはね除けたいという思いが、ヤヨマネクフやシラトカ（花守信吉しんきち）の、あの白瀬轟陸軍中尉の南極探検隊に加わることに繋がっていくのである。その参加は、困難な探検にアイヌの人間もいたということを、世に知らしめたいという思いからであった。

『熱源』の舞台は極寒の樺太や南極であつたりするが、物語の中で「熱い」あるいは「熱」という言葉が繰り返し語られている。たとえば南極でヤヨマネクフは思う、「生きるための熱

の源は、人だ。／人によって生じ、遺され、継がれていく。それが熱だ。自分の生はまだ止まらない。熱が、まだ絶えていないのだから。」と。ここに小説のテーマが込められているが、『熱源』は日本を新たな眼で見直す契機となる小説でもある。また、金田一京助や石川啄木、さらに長谷川辰之助（二葉亭四迷）や『日本之下層社会』の横山源之助なども登場して、読者の興味を惹くであろう。

『熱源』は北の地の話であつたが、南の地、沖縄にあって日本国家を指弾しているのが、「沖縄・日本・東アジア年代記 2016年1月―2016年3月」という副題目のある、山口泉の著書『まつろわぬ邦からの手紙』である。本書は、『琉球新報』に連載された三九編の本編と、その各編毎に付された「追記ノート」（総量は本編を上回る）によって構成されていて、二〇一九年六月にオーロラ自由アトリエから上梓された。著者の山口泉は、一九七七年に小説「夜よ 天使を受胎せよ」で第一三回太宰治賞優秀作を授賞した、小説や評論を含めて多くの著書のある文学者だが、福島原発事故後の二〇一三年に東京から沖縄に移住して、旺盛な執筆活動を通して現在の日本社会と日本人に対して、まさに警鐘を鳴らし続けているのである。その警鐘は同じく山口氏の著書で二〇一六年一月にやはり

オーロラ自由アトリエから上梓された『辺野古の弁証法 ポスト・フクシマと「沖縄革命」』でも鳴らされていた。すなわち、「事態は末期的である。東京電力・福島第一原発事故をきっかけとして一斉に継起したファシズムの策動をはじめ、さまざまな事態が深刻な危機的段階へ踏み込もうとしている」と。そして、「主権在民を根底から否定し、民の命を私物化する安倍内閣。沖縄の現在を知ろうとしないばかりか、この戦後最悪の政府が、おのが身に揮う圧制にすら、死んだように無頓着な日本社会。」、とも語られていたのである。

『まつろわぬ邦からの手紙』を読めば、事態はさらに悪化の一途を辿^{たど}っていることがわかる。もちろん、「何より諸悪の根源は安倍首相自身にほかなるまい」わけで、本書には痛烈な安倍批判の言葉が語られている。そして、それらはすべて正しい、と言える。たとえば、「安倍晋三という低劣なファシスト」、「愚昧と無教養の極みの安倍晋三」、「今後、人類の敵 安倍ファシズムの「改憲」策動や沖縄弾圧は、猖獗^{しょうけつ}を極めるだろう」、「など。もちろん、愚劣、卑劣、陋劣^{ろうろう}なのは、安倍晋三だけではなく安倍内閣の総体がそうだったのである。山口氏はこうも述べている、「この安倍政権のおぞましさを極め付けが、麻生太郎副首相擁護のための「セクハラ罪という罪はない」との「閣

議決定」だろう。なんという無教養。なんという没道義。／ここまできると、もはや存在そのものが人類史の汚辱たる、醜悪な内閣である」と。

私も自身の最近著の中で、「暗愚で危険な宰相安倍晋三」ということを述べていたので、山口氏の言葉には大いに同感して次々と引用したのだが、氏は単に痛烈な批判の言葉をぶつけているだけではない。多くの人たちが意識にも止めていないことで、しかし忘れてはならない重要な事実を、本書で繰り返し指摘しているのである。

安倍晋三の第一次内閣時代のことである。二〇〇六年一二月二二日、吉井英勝・衆議院議員（日本共産党）の国会質問に対して、「第一次政権時の安倍晋三首相は「地震・津波で全電源喪失は起こらない」と、なんの根拠もなく答弁し、必要な対策を怠ったのである」と山口氏は述べている。「その結果、二〇一一年三月一日、東日本大震災による冷却停止が一気に炉心溶融をもたらし、チェルノブイリ原子力発電所事故に教倍する、人類史未曾有最悪の核破局に至った東京電力・福島第一原発事故こそが」起こったのだ、と。マスコミが一切触れないこのことを、私たちは忘れてはならないだろう。福島原発事故を誘発させたのは前宰相の安倍晋三だったということを。

山口氏の峻厳な眼は、天皇制の問題にも向けられている。かつての枢軸国同士であったドイツの、その戦後世界への姿勢と、日本のそれとがいかに隔たっているかについて触れた後、山口氏は「前述したドイツとの隔たりの最大のもの」「戦前」「戦中」の支配構造が、現在この瞬間でそっくり持ち越されてきていることであり、何より日本国の中枢には帝国主義侵略戦争の責任を問われるべき天皇制が厳然として存在しているのだから。」と述べている。私たちは、昭和天皇裕仁がマッカーサーに沖縄とその他の琉球諸島をアメリカの軍事占領に供する意図を伝えたことも忘れてはならないだろう。さらに、一九四五年二月に近衛文麿が降伏するべきだということを天皇裕仁に「上奏」したのだが、天皇裕仁は、天皇制存続のためにすこしでも有利な戦況での講和を望んでいたために、その「上奏」を無視し、その結果、全国の大空襲、沖縄戦の惨劇、そしてヒロシマ、ナガサキの原爆を招いたのである。私たちはこのことを忘れてはならない。昭和天皇裕仁は鬼籍に入った人物であるが、戦争に関わる彼の責任は、今後も厳しく追及されなければならない。そのことを考えると、山口氏が日本には今なお「野党」は存在しているのか、問い掛けて次のように述べていることも、私は大いに納得できるのである。すなわち、「共産主義」を標榜

しているはずの政党が、しかも天皇制を全肯定し、恬として恥じることはない、このみずばらしい悪夢のごとき状況（略）」と。まさにその通りである。その党については、「天皇制打倒」を綱領に掲げていた戦前のときの方が、いかに輝いていたかと思われる。その党は、近年はますますダメな組織になっていつていることについて深甚な猛省をするべきなのだが、衆議院議員の数が一ケタから二ケタになったぐらいで、（我が党は勝利した）と言っているようでは、たとえば日本がファッショ化するような事態になったとき、到底それに抗していけないだろう。

私自身の考えも少々述べてしまったが、話を本書に戻すと、山口氏は福島原発事故後、子どもたちの間で小児甲状腺腫が、疫学上は一〇〇万人に一人か二人の発症率なのに、福島では二〇一八年三月末で一九八人見出されという事実や、一人国会で奮闘した山本太郎氏のことなどに本書で詳しく述べている。また、日本文学の研究をしている人間としても私が大いに共感したのは、小林秀雄に対する手厳しい批判である。小林秀雄は「疑惑Ⅱ」（一九三九・七）で、「国民は黙つて事変に処した。黙つて事変に処したといふ事が事変の特色である。事に当つて適確有効に処してゐるこの国民の智慧を現代の諸風景のうちに嗅ぎ分ける仕事（略）僕には快い。あとは皆んな詰らぬ」と

述べている箇所を引用し、こう語る。「私が日本最大の戦争犯罪文学者と考える「批評家」は、かつてこうして詭弁を弄び、大日本帝国のアジア侵略に加担する臣民に、尊大かつ卑屈に迎合した」と。たしかに戦時下の、とくに日中戦争下の小林秀雄は実に危うい言説を語っているのである。そして、戦後はそのときの自分について、「僕は馬鹿だから反省しない」と嘯いたのである。そういう批評家が「権威」であり続けていることに、山口氏は「制度的な「日本文学」の欺瞞性を指摘している。

日本社会には、このような問題を抱えているのだが、私たちがそれとははつきり気づくことなく、しかし私たちを包んでいる曖昧で気味の悪い状況を描いていると思われる小説を、次に見ていきたい。

二 平常に溶け込んだ異常——『むらさきのスカートの女』

第一六一回芥川賞の『むらさきのスカートの女』（朝日新聞出版、二〇一九・六）の物語は、語り手の「わたし」で権藤という女性が、近所で「むらさきのスカートの女」と言われている、三十代前半の女性に関心を持つところから始まる。この女

性は、後に日野まゆ子という名であることが明らかにされるが、彼女は色々な勤め先で不定期に働いているようで、働いていないときは公園で過ごしたりしている。その少し風変わりな雰囲気を持つ彼女は、公園で遊ぶ小学生たちの関心の的でもあって、近所の人たちの間でも「知名度」が高いとされている。彼女は少し不潔な感じもしていて、また倦怠感を漂わせている女性なのだが、「わたしはもうすいぶん長いこと、むらさきのスカートの女と友達になりたいと思っている」のであった。

やがて日野まゆ子は、「わたし」と同じ職場の人間となり、ホテルの清掃の仕事をするようになる。日野まゆ子は仕事を覚えるのもこなすのも早く、同僚たちからも評価されるようになり、同僚たちとうまく合わせてもいるようなのだが、彼女は「どこかもの悲しげな雰囲気を漂わせて」いた。しかし彼女は、この職場で働き出してから、同僚たちから「美人になったよね」と言われるようにもなり、そして職場の上司である所長とも付き合い始め、同僚たちからその付き合いを噂されるようになる。そうすると今度は、彼女の高かった評価は低くなり、同僚たちから後ろ指を指されるようになる。そして物語の最後では、彼女はその所長とお決まり通りの痴話喧嘩をして別れるのである。

このように、日野まゆ子に焦点を当てて物語を見てくると、特別変わった話のように思われないだろう。もちろんこの物語には、謎めいた女性である日野まゆ子の、その少し不可思議な雰囲気を中心に語られているために、読者は奇妙さを感じながら読み進めていくが、しかし物語も日野まゆ子も、取り立てて異常だというのではない。むしろ平常であつて、物語も淡々と普通に進んで行くのである。

しかしながら、視点人物で語り手の「わたし」の方に眼を向けると、この物語は途端に不気味な様相を帯びてくる。「わたし」が日野まゆ子に関心を持っていき、やがて彼女の「友達」になりたいと思つたのはわかるとしても、しかし「わたし」がまゆ子の私生活までにほとんどストーリーカーのように密着しているのは異常である。しかし不思議にも、日野まゆ子には「わたし」の存在が目に入らないかのようなのである。どうも「わたし」は自らの気配を消すのが上手らしい。そのことは、痴話喧嘩で怪我をして入院した所長を同僚と見舞つたとき、「わたし」が「所長」と声をかけた場面によく表されている。それは、所長が「うわっ。びっくりした。権藤さん、いつからそこに」と言つたのに対して、「わたし」は「さっきからずっといました」と応える場面である。

能う限り自らの気配を消して、強い関心を持った他者の後を追ひ、それを生活の楽しみや目的、さらには生き甲斐にしているような人間が、「わたし」なのである。この「わたし」に比べれば「むらさきのスカートの女」である日野まゆ子などは、少々風変わりなだけであつて、まともな人物のように見えてくる。さらに、物語の最後で「わたし」は、以前ホテルに宿泊した女優の下着を所長が盗んだことをタネに、所長を強請^{ゆすり}るところがあり、作者はこの場面で「わたし」の不気味さの、その片鱗を示していると言える。

いったい、「わたし」はどういう存在なのか。おそらく多くの読者は、風変わりな「むらさきのスカートの女」の方に眼を向けがちかも知れないが、しかしながら「わたし」の方が格段に異常である。表面的には平常な生活とその人付き合いに隠れているが、自分自身というものが無い「わたし」、そして「友達になりたいと思つている」人を注視し追いかけることが生活の目的のような「わたし」は、どう見ても異常である。

その異常さは、第一五一回の芥川賞を受賞した村田紗耶香の『コンビニ人間』（文藝春秋、二〇一六・七）に通じあうものがある。これはコンビニ従業員のためのマニュアル通りに動くことで、「普通の人間」、「正常」の人間を演じている（と思っ

ている）恵子が主人公の物語である。恵子は、自分には固有の「私」など無いのだと思うが、しかし他の人間も、その周りの人間たちから「伝染」されたものを受け入れているだけではないかとも思っている。『むらさきのスカートの女』の権藤も『コンビニ人間』の恵子も、ともに〈自分〉というものが無く、またそのことに何の疑問も違和感も持っていない点において共通している。物語の最後では、恵子には「コンビニの『声』」さえ聞こえるようになるが、これは宗教的な洗脳の世界に入りかけていると言えよう。

宗教的世界と言えば、新興宗教に捉らわれた一家を描いたのが、野間文芸新人賞を受賞した、同じく今村夏子の『星の子』（朝日新聞出版、二〇一七・六）である。新興宗教と思われる団体が売り出している〈金星のめぐみ〉という名の水を、会社と同僚に勧められて購入し、その水が赤ちゃんだった当時の「ちひろ」の湿疹や夜泣きなどに（偶然に）良く効いたために、「ちひろ」の両親はその団体に入会したのである。しかし物語は、小学校や中学校時代の「ちひろ」の、主に学校での日常生活の話を中心に展開されているために、読者は宗教的な世界の異常さを感じながら物語を読み進めることはないだろう。もっとも、父の弟が兄夫婦の目を覚まさせようとしたり、両親に見

切りをつけた、「ちひろ」の姉の「まあちゃん」が家出をする話なども語られていて、両親が新興宗教に凝ったりすると家庭生活がどうなっていくかという問題も語られてはいる。

しかしながら、この小説においても、異常は平常に埋め込められていて、その世界では異常がそれほど異常には見えなくなっている。現代社会では、私たちは異常さに気づかず事態を受け入れていることが多いのではなからうか。三年前の『コンビニ人間』の時よりも、事態はさらに進んでいるのかも知れない。このような状況の中で、たとえば哲学者たちは今どういうことを考えているのであろうか。

三 異論に耳を傾けること―哲学および天皇

『日本哲学史』（昭和堂、二〇一八・一〇）は、日本哲学史を専門の一つとする藤田正勝の著書で、明治初期の西周たちによる西欧哲学受容から始まって、戦後以降までの哲学者、たとえば廣松渉やイスラム哲学の井筒俊彦や仏教思想の中村元、さらには精神医学の木村敏などにも論及されていて、日本近代思想の通史とも言うべき、五百頁近くある実に浩瀚な著書である。しかも、その全てが藤田氏一人によって書かれている。その中

で藤田氏は当り前と言えば当り前のことであるが、実は私たちの多くが無視したり蔑ろにしがちなことについて、こう述べている。「文化」一般がそうであるように、哲学もまた異なった思考に触れ、そこに自己にないものを見いだしたときに、自らの制限に気づき、従来の枠を超えて自らを発展させ、豊かにすることができると。」と。

つまり、異論に耳を傾けて初めて思考は豊かに展開するということであるが、このことに関連して藤田氏は、「他の主張を押さえこむところではなく、むしろ他の主張と競いあい、牽制しあうところにこそ自由が成立するという逆説」を、福沢諭吉は論じていたと述べている。これは、「他の主張と競いあい、牽制しあう」ためにも、まず「他の主張」の存在を認め、次に「他の主張」を聴いて理解するということがなければならぬ、ということである。そして、その作業と表裏をなしているのは、自分が抱えている自説は果たしてそれでいいのか、と自らに対しての問い掛けを行うことである。

藤田正勝と同様のことを述べているのが、哲学者の野家啓一の『はざまの哲学』（青土社、二〇一八・六）である。この著書はこの四半世紀に発表された論考を纏めたもののようで、マツハ科学論やホワイトヘッドの科学革命論など、野家氏の専門の

一つである科学基礎論に関わる論考や、フッサール現象学や分析哲学に関する論考などが収められていて、日本の代表的哲学者が、現在どういうことを考えているのか、その一端を知ることができる著書である。

その中で野家氏は、「自然科学が未知へと反転する作業である」とすれば、哲学は既知を未知へと反転する営みにほかならない」と語り、その「営み」の一例と言える、フッサール現象学における「現象学的還元という手続き」について、次のように述べている。その「手続きによって、自明性、すなわち「自然的態度の一般定立」を括弧に入れること、あるいはエポケー（判断停止）すること」で、「自明性を主題化し、自明性の成り立ちを問い直す」のであって、その「還元を通じて、世界は自明性を剥ぎ取られた「現象」に変貌する」のである、と。

「自明性」は多くの場合、私たちが全く無自覚に自文化中心主義の中に収まっている場合に生まれるものである。そのときには、（自分の考え方は当然なことだ）と何の疑問もなく思ってしまうのである。その場合の自らの見方、認識のあり方をひとまず括弧に入れて、すなわち「エポケー（判断停止）」して、たとえば異文化や「異他なるもの」へ接近するのである。ただ、括弧に入れると言っても、私たちは「一挙に普遍的視点へ

と飛び移る」のではない。自明化した自らの視点を（果たしてそうか）と相対化する作業を通して、異文化や「異他的なるもの」に接近し、自らの視点を通して見られたものとの比較を行ったりするわけである。そのことについて野家氏はこう述べている、「文化的世界の文脈で言えば、現象学的分析は、異文化を「一つの文化」のもとに統合するのではなく、意味理解と意味構成を通じて多様な文化の共存を可能にするのである」と。

また、解釈学についても同様のことが言えるとして野家氏は、「（略）解釈学は、むしろ「通約不可能性」を前提として異質の他者と出会い、異他的なるものをその異なりにおいて尊重し理解することを目指す営みと言うことができる」、と述べている。さらには、このような野家氏の考えは、この著書が「はざまの哲学」と題されていることに象徴的に示されていると言えよう。「はざま」については、本書の「はじめに」で、「（略）山と山とのあいだを行き来する通路、あるいは対立しつつ共存することを可能にする場所」と述べられているように、「はざま」は、自文化や一つだけのものに収斂するのではなく、まさに「異質の他者」たちと「対立しつつ共存する」空間を言い表しているのである。

藤田正勝や野家啓一が述べていることは、哲学という学問の領域だけに留まるものではなく、広く人間の営み全般にも言えることであろう。とりわけ、政治的社会的な事柄についてはそうでなければならぬ。「異質の他者」の言説や異論に耳を傾けることである。しかしながら、現代の日本では、「異質の他者」を排除したり、「異論」を許さないという、言わば同調圧力が高まっているのではないだろうか。特にそのことを実感するのは、この前の新元号と天皇退位をめぐる加熱ぶりをめぐってである。そこには、元号や天皇制に異議を唱える声を許さない空気がある。

元号は、中国の皇帝が空間だけでなく時間をも支配していることを表すために作ったもので、古代の列島国家（大和朝廷）がそれを取り入れたのである。したがって、列島では元号を使うことは、天皇の支配下にあることを認めるという意味があった。もちろん、今日そういうことを意識している日本人はほとんどいないであろう。しかしながら、元号を使うことで、天皇の存在が人々の脳裏に刷り込まれてしまうことを、私たちは知らなければならない。そしてその先に予想されるのは、天皇の存在に拝跪してしまう心性を、私たちが持つてしまうことである。注意しなければならないのは、天皇の存在に表されている

ように、人の上に人を造るような社会は、当然のことながら人の下に人を造ることである。未だに差別の問題が無くならない原因の中心に、天皇制があると言えよう。

もっとも、平成天皇明仁は戦後の民主主義と日本国憲法を守る意志が強くあつて、このことが左派陣営からはむしろ評価されたのである。逆に右派陣営には平成天皇は評判が悪かった。だから、平成天皇は護憲の立場であるのに対して、自ら「右翼の軍国主義者」だと認める安倍晋三が首相だった政府は改憲の立場である、という異様な構図だったのであるが、おそらく右派陣営は新天皇を自陣へ取り込もうと画策していると考えられる。私たちは、新天皇を平成天皇の立ち位置から反動の方に後退させてはならない。

それとともに私たちは、天皇家の人たちを天皇制の軛くみから解放することを考えるべきである。彼らには職業選択権、選挙権、信教の自由などの基本的人権が無いのである。まさに、これは「聖なる奴隸」(普孝行)である。これは非人間的な状態である。中野重治は小説「五勺の酒」(一九四七・一)で主人公の老中学校長に語らせている、「問題は(略)天皇制廃止と民族道徳樹立との関係だ。あるいは天皇その人の人間的救済の問題だ」、「恥ずべき天皇制の頽廢から天皇を革命的に解放するこ

と」だ、と。たしかに、そうである。

それが今後の目指すべき方向であると考えられるが、それは逆の方向を盛んに鼓吹している、ほとんど噴飯ものの著書が出た。百田尚樹の『日本国紀』(幻冬社、二〇一八・一一)である。私はこれから『日本国紀』を完膚無きまでに批判するつもりだが、もちろん百田尚樹の主張に耳を傾けた上でそうするのである。

日本史研究について専門的な訓練を受けた人であっても、日本通史を書ける人はほとんどいないと言っている。中世史が専門で博學であつた網野善彦は、一九九七年に岩波新書から『日本社会の歴史』(上・中・下)と題する、日本通史の本を刊行しているが、「むすびにかえて」の中で、近代以降の歴史が重視されている現在、「それをほとんど欠落した本書のようなものを公刊すること自体に、御批判があることも十分に予想しうる」、と述べている。実際、この本は近代以降が手薄な叙述に終わつていて、先の言葉は学者としての誠実な反省の弁であろう。網野善彦のような碩学でさえ、そうなのだ。ましてや日本史研究の訓練も受けていないと思われる人物が、通史など書けるはずがなく、そのことは当たり前すぎるほどのことだが、何と(一)百田尚樹は書いたのである。

そのことを思ってみても、『日本国紀』がどういう類の本か、どの程度の本かがわかるだろう。まず、これが一応学術的な歴史書を装っているらしい本なのに、巻末に引用・参考文献等が一切挙げられていないことに、まず読者は驚かなければならない。そんな歴史書があるだろうか、と。そのことと関連して、著者の百田尚樹は第一次史料をほんの少しでも読んだのだろうか、と疑問に思わざるを得ない。おそらく、近代以降のものとはともかく、それ以前の歴史については、史料は全く読まず（読めず）、日本通史の概説書を何冊か読んで、著者はそれなりの通史のアウトラインを自分流に描き、その中に自らが抱懐している、稚拙で反動的な政治的見解を所々に埋め込んだのが、この『日本国紀』である。だから史実も、その拙劣な政治的見解に合うように、都合良くねじ曲げられている。

たとえば、関東大震災で流言飛語やデマによって朝鮮人が虐殺されたということについて、「この話には虚偽が含まれている」（傍点・引用者、以下・同）という言い方をして、「一部の朝鮮人が殺人・暴行」等を行ったのだ、と語られている。注意したいのは、どこが虚偽なのかは言わないことによって、あたかも「この話」のすべてが「虚偽」であるかのような印象を与えようとし、また、「一部の朝鮮人」の暴行等（この指摘自体

が怪しい）をことさら言うことによって、朝鮮人全体がそうであつたかのように、これも印象操作をしているのだ。さらに朝鮮人に対しての強制連行など無く、朝鮮人が自発的に日本に来たがったのだと言うのである。これらの指摘についても、一切、史料が示されていない。

そして百田尚樹は、甘粕憲兵大尉による、大杉栄、伊藤野枝たちの虐殺には触れていないのである。さらには、悪法の代名詞とも言える治安維持法の成立についても、全く触れないのである。これらは日本近代史を語る際には、必ず言及しなければならない事柄であるのに、である。自分の政治的見解にとつて都合の悪い史実は、語らないのである。

また百田尚樹は、満州事変に關してのリットン調査団の報告について、調査団は、「満州事変には相応の発生事由があつた」と報告した、とする。だが、リットン調査団の報告書は、事変の発端となつた柳条湖事件を正当な軍事行動と認めていず、「満州国」建国は中国人の自発的な運動ではないとしたのだ。しかし、百田尚樹はそれらのことをばやかしして、「調査団は日本による満州国建国は認めず」とだけ述べて、「認め」なかつたリットン調査団の方に瑕疵があつたかのように語るのである。

日本はこの事変から一五年戦争に入つていくが、百田尚樹

は、昭和天皇裕仁は「御前会議の場でも（略）自らの意見を口

にすることはなかった」と語る。戦争責任について裕仁を免罪するためにそう言っているのだが、二・二六事件であれだけ果断であつた裕仁が、戦争政策をめぐる御前会議で無口であつたはずがないではないか。そのことは、当時の侍従たちの日記からも実証されている。また史実の捏造は、六〇年安保で反対デモの学生たちは、「日本社会党や日本共産党に踊らされていただけの存在であつた」というところにもある。安保闘争を牽引した学生たちは反日共系の組織に所属していたのだが、そういう虚偽を語るのだ。もっとも、単なる無知ということもあるのかも知れない。

『永遠の0』もデマゴギー満載の小説だったが、『日本国紀』はそれを上回る本である。これが六五万部も売れているという。現代日本人の脳は劣化したのか。論うのも馬鹿らしい本だが、売れ行きをみると噴飯ものの本であつても、一々反論しなければならぬ。

次に、世界を席卷しているコロナ禍に対して文学はどう向き合っているのか。それについて見ていきたい。

四 新型コロナ禍と文学

感染症の災厄を描いた文学作品としてよく知られているのが、アルベール・カミュの『ペスト』であろう。『ペスト』はフィクションであるが、現実においても（そうであろう）と思われる事態が描かれている。それはペスト禍における格差の増大という問題である。こう語られている。ペストの蔓延とともに、「貧しい家庭はそこできわめて苦しい事情に陥っていたが、一方富裕な家庭は、ほとんど何ひとつ不自由することはなかった」（宮崎嶺雄訳）、と。また、蔓延がさらに拡大した「この時期からは、実際、困窮が恐怖にまさる力を示す事実が見られた」と。

カミュが『ペスト』のエピグラフに引用している言葉は、一八世紀のダニエル・デフォアの『疫病流行記』（他の翻訳名「ペスト」）からのものだが、その『疫病流行記』においても「無数の貧乏人」に関して、「つまり、彼らは疫病そのものにあたれたというよりも、その疫病がもたらしたものによつて、いいかえれば、飢餓と窮迫と欠乏のためにたおれていったといえよう」（平野敬一他訳）、と語られている。

両作品とも、疫病がもたらす社会的災厄の最たるものは何か

ということをしつかりと掴まえていけると言える。もしも、文学が新型コロナの問題を突き詰めていくならば、そういう問題にも突き当たると考えられるが、しかし今日の日本文学は、コロナ禍の問題そのものを文学作品に充分に昇華させるところまでには、まだ行っていないようだ。それは当然なことであろう。もっとも、そういう中においても、コロナ禍の問題を小説の中に取り込もうとする試みも見られる。

たとえば、金原ひとみの「アンソーシャル デイスタンス」〔新潮〕、二〇二〇・六〕である。この小説は、十三の時からリストカットを繰り返して、高校は合法ドラッグに嵌^{はま}って中退し、大学検定を受けて大学に入学した沙南という女性と、その恋人で幸希^{こうき}という男子大学生の物語である。就活が厭^{いと}になった沙南が「心中しない？」と幸希に語りかけ、二人で車で心中旅行に出ることにする。その中で二人の愛は一層高まっていき、幸希はこう語る。「自分を苦しめるもの、自分の好きな人を苦しめるものの絶滅を強く願う。(略) コロナが蔓延し始めた世界の中で、こんなにも幸福な創造をできることに初めて喜びを感じた」と。そして、「こんな幸福な世界は、コロナがなければ想像もできなかったらう」とも。

この小説は、ソーシャル・デイスタンスや自粛が声高に言わ

れ、新型コロナは空気感染は無いのに、野外でも多くの人がマスクを付けているというような、異常に過敏な事態、同調圧力の強い風潮に対して、異議申し立てをした小説である。コロナ禍が二人の恋人にとって幸せをもたらしたと言っているのだから。コロナ禍の中の事態にやはり違和感を語っている小説が、「新潮」同号掲載の鴻池留衣「最後の自粛」である。

これは、埼玉県のある県立男子校を舞台に共学化に反対する男子高校生たちの物語をして始められながら、コロナ禍や気象変動の問題や東京五輪を巻き込みながら展開するSF的な小説であるが、たとえば「自粛」に対して次のように語られている。「死ぬことよりも、死ぬことを恐れて行動を自粛することの方が恐ろしかった」と。そして、物語の最後で主人公は、これから抑圧者のいない、新しい時代が始まると宣言するが、これはコロナ禍が世界を良い方向へと導く契機になれば、という作家の願いが、やや唐突に語られていると言えよう。

こうして見ると、コロナ禍の問題はまだ十分に小説に造形化されるまでに至っていないと言える。小説よりもむしろエッセイなどに注目したい。

新型コロナ禍の問題でエッセイや評論で、まず注目されるのは、川村湊の『新型コロナウィルス人災記 パンデミックの31

日間』（現代書館、二〇二〇・五）であろう。これは二〇二〇年四月七日から五月七日までの日誌となっていて、川村氏は丁寧な情報を追いながら新型コロナ禍の本質が人災であることを説得的に語っている。

川村氏は、「新型コロナウイルス感染症対策の基本方針」が今年の二月二五日の日付を持っていることに注意すべきであると述べる。なぜなら、前日の二四日は東京五輪の一年延期が決定した日であって、実はそのことが決定するまでは、コロナ禍対策よりもオリンピック・パラリンピック開催を優先させていた、ということが示されているからである。コロナ禍対策の初動の遅れは、宰相安倍晋三と東京都知事小池百合子の二人の判断の遅延にあったわけである。また、ダイヤモンド・プリンセス号の乗客に対してPCR検査を全員にすることをためらったのは、その検査で陽性となった場合の患者を、収容する病床が全く足りないことが分かっていたからである。病床の数を減らしていた事実は、公衆衛生政策がいかに国民の命を軽視したものであったかも示していると言えよう。

また、多くの人が首肯するだろうと思われることを川村氏は述べている。あのアベノマスクのことである。マスク製造費と配送料などを加算すると四六六億円になることについて、「こ

んな愚作のために500億円近くが浪費されると考えれば、愚かな人物をトップに持った国民の不幸はこの上きわまりない。しかも、それを国民に賞讃される上策だと官邸は考えていたのだというのだから、開いた口が塞がらない」と。本書で次々と語られる川村氏の批判は、まさに宰相安倍晋三の「愚か」その、まさにその肯綮に当たっている。

ただ、それだけに留まらず、新型コロナ禍の背景には「人間の過剰な環境破壊、大自然の闇雲な侵入、（略）無謀で不遜な地球への挑戦」があることを語っている。もっとも、本書では「文明論的な議論」に深入りすることは避けられていて現政権の愚策、すなわち「人災」に批判の焦点は絞られている、私たちは「文明論的な議論」についても見ておく必要があるだろう。その点において注意されるのが、哲学と経済思想が専門の斎藤幸平の論考「コロナ・ショックドクトリンに抗するため」に（「群像」、二〇二〇・六）である。

よく新型コロナウイルスの世界への急速な拡散は、人類が地球システムにかつてない規模で介入するようになった「人新世」（アンソロポセン）にピッタリであると言われることがあるが、斎藤氏はそうではなく、資本主義こそが危機の確率を飛躍的に増大させていると述べている。

たとえば、アグリビジネスが野生動物の生息地域を破壊するために、そこにいた未知のウイルスが人間社会に侵入することになったのである。斎藤氏によれば、「多国籍企業がその危険性を知っている」のだが、目先の利潤を追い求めようとするのである。事態をより深刻化させたのが、いわゆる新自由主義であった。その緊縮政策は保健福祉体制を縮小・解体させ、日本では国立感染研究所の人員や研究費が減らされたのである。その結果が今の新型コロナ禍のパンデミックである。

歴史家のエリック・ホブズボームと世界システム論のイマニエル・ウォーラステインは、人類は二一世紀前半で分岐点を迎えると述べた。穏やかで自由で平等の行き渡った社会を構築できるか、それとも破滅の道かの分岐点である。今、その分岐点に人類は立っていると言える。

〔付記〕本稿は週刊新社会「一一五四号（二〇二〇・三・一七）、一一六九号（同・七・一四）、一一七〇号（同・同・一二）、および「千年紀文学」一二七号（二〇一九・七）に発表した小論に加筆して一つの論文にまとめたものである。

（あやの ひろはる／本学教授）